（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　小笠原　弘　幸

本論文は、１３世紀末にアナトリア西北部に出現し、イスラーム世界の超大国として６世紀以上に亘って存続したオスマン帝国につき、１５世紀から１６世紀中葉に至る古典期の同時代人士の手になる史書における、帝国の起源とオスマン家の王統についての言説を、版本のみならず写本も含め、同時代の史書を博捜して分析したものである。その結果として、オスマン家の王統については、トルコ・モンゴル的起源を強調する言説と、旧約聖書・イスラーム的起源に重点を置いた言説とが存在し、オスマン王統の権威の正当化に資していたことを明らかにした。そしてトルコ・モンゴル的起源説としては、オグズ伝説が中心を占め、なかでもギョク説とカユ説の両説が存在していたこと、より古い層を示すと思われるギョク起源説が、より高い権威の根拠足りうるカユ説に取って代わられ、これが公定的言説となっていったことが明らかとされた。また、旧約聖書・イスラーム的起源説では、イスラーム世界において広くトルコ族の祖とされたヤペテ起源説と、より高い権威を有するエサウに起源を求める説が存在していたが、エサウ説は支配的言説となりえず、ヤペテ説が中心となっていったことも明らかにした。そしてトルコ・モンゴル的起源言説と旧約聖書・イスラーム的起源言説が融合して、古典期における公定的言説が形成されたことを明らかにした。これらの諸論点は、欧米及びトルコ本国において部分的には言及されてきたが、本論文をもって初めて構造的体系的な形で解明されるとともに、新たな研究視野が開かれた。

本論文にも、１．史料として用いた史書類がいかなる受け手を想定して作られたかについて、十分解明されていないこと、２．中央アジアに遡るトルコ・モンゴル的伝統との関わりについてなお考究の余地があること、３．上記で取り上げられた言説につき、史書のみならず他のジャンルの史料群も視野に置き検討する必要があることなど、なお不足な諸点がある。

しかしながら、それにもかかわらず、版本のみならず写本も含めたトルコ語・ペルシア語・アラビア語の史書を博捜し、オスマン帝国の起源とオスマン家の王統についての１５世紀から１６世紀中葉までに至る諸言説を精緻に分析し、新知見を提示した本論文は、当該分野において、本邦は勿論のこと、欧米・トルコ本国においても未踏の領域に踏み込んだ意欲的な労作であり、博士（文学）の学位を授与するに値するものである。